



大阪体育大学 開学50周年記念シンポジウム

## 報告書



大島鎌吉 (1908-1985) 初代副学長

石川県金沢市出身。ロサンゼルスオリンピック銅メダリスト。元三段跳世界記録保持者。1964年東京オリンピック強化委員長・選手団団長。1982年オリンピック平和賞受賞。



加藤橘夫 (1907-1992) 2代目学長

東京都出身。元厚生省体育官、東京大学教授。1964年東京オリンピック国際スポーツ科学会議委員。日本体育学会を創設、理事長・会長を歴任。

# 体育・スポーツの力

— 新しい時代を切り拓く —

2015年1月11日 [日] 13:30~17:00

大阪市中央公会堂

ごあいさつ



### 岩上 安孝

群馬県出身66歳。1972年に東京教育大学体育学部を卒業、群馬県公立学校教員、群馬県教育委員会を経て、文部省体育局専門職員に。その後、和歌山県教育委員会保健体育課長、文部省体育局競技スポーツ課長、文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課長などを歴任。2005年には大阪市に出向（世界陸上組織委員会）、2010年から国立スポーツ科学センター（JISS）センター長およびナショナルトレーニングセンター（NTC）施設長。

2014年2月に副学長および体育学部教授として大阪体育大学に赴任し、4月から第8代学長に就任。

1965年（昭和40年）、大阪体育大学は「不断の努力により智・徳・体を修め社会に奉仕する」を建学の精神に、関西では初の体育大学として茨木の地でその一步を踏み出しました。更に大阪体育大学としての充実・発展に向けた将来構想のもとに、1989年（平成元年）現在の熊取キャンパスへの移転を経て、ここに創設50周年の節目を迎えることができました。

顧みますと、一期生87名が本学の門を叩き歴史の扉が開かれたわけですが、今日、本学を巣立った卒業生は、19,000名余りを数えるまでとなり、日本社会の発展を担う有用な人材として期待され、学校教育、地方自治体、企業、医療・福祉、プロスポーツなどの幅広い領域で活躍するに至っております。

本シンポジウムは、本学のこれまでの歩みを支えていただきました皆様への感謝の気持ちはもとより、更に次の50年に向けて新たに歩み出す力にさせていただきたいとの思いを込めて企画いたしました。

当日は、誰もが憧れるオリンピックを題材に、世界の架け橋となるスポーツの魅力を基調講演でお話しいただき、また、2部構成としましたシンポジウムでは、その基盤と心・技・体の力をスポーツ科学面と体育・スポーツ教育の側面から経験豊かなパネリストの皆様にご話しいただきました。

この報告書には、これからの時代を切り拓いていく上での体育・スポーツ領域への期待はもとより、体育・スポーツが有する多面的な力を再考していくためのヒントが凝縮されているものと確信しております。

なお、シンポジウム開催にご協力いただきました皆様方に紙面をお借りし、厚く御礼を申し上げます。

— 趣旨 —

大阪体育大学の柱は「競技スポーツ」と「体育・スポーツ科学」の二つである。これは、大島鎌吉元副学長(1964年東京オリンピック強化委員長・選手団団長、1982年日本人初のオリンピック平和賞受賞)と加藤橋夫元学長(日本体育学会創立メンバー)の遺志である。本学は、1965年の開学以来50年間、この志を胸に、競技・研究・教育において日本スポーツ界をリードしてきた。

本シンポジウムでは、これらの軌跡を見据え、現代社会を展望して、新しい時代を切り拓く「体育・スポーツ」の「力」について議論する。

開会の挨拶 13:30

岩上安孝  
(大阪体育大学学長)

総合司会:岩崎友香(本学卒業生/  
有限会社ソフィア企画&カンパニー所属)

13:40

}

14:40

基調講演

「体育・スポーツの夢と未来」



柳本品一 氏

1951年生まれ。大阪府出身。  
1976年モントリオールオリンピックバレーボール4位。  
1980年第15回日本リーグから第18回日本リーグまで新日鐵選手兼監督、1997年第4回Vリーグから第8回Vリーグまで東洋紡オーキス監督、2003年アテネ・北京オリンピックバレーボール全日本女子チーム監督、2004年アテネオリンピック5位、2008年北京オリンピック5位。  
2012年一般社団法人アスリートネットワーク理事長、2013年大阪市教育委員会事務局顧問(桜宮高等学校改革担当)。

14:50

}

16:00

シンポジウム 1

「スポーツ科学と競技力向上の未来」

司会:梅林薫(大阪体育大学教授/トレーニング科学センター長)



司会 梅林薫



平野裕一 氏

1953年生まれ。東京都出身。  
東京大学大学院修了後、東京大学教育学部助教授などを経て、2005年より国立スポーツ科学センター副センター長、スポーツ科学研究部長/主任研究員。  
日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会委員、日本オリンピック委員会情報・医・科学専門部会委員を兼任。専門分野は、スポーツバイオメカニクス、トレーニング科学。  
元東京大学硬式野球部監督。



山本 篤 氏

1982年生まれ。静岡県出身。スズキ浜松AC所属  
2008年大阪体育大学体育学部卒業、現在大学院博士後期課程3年生。  
北京、ロンドンパラリンピックに2大会連続出場。北京パラリンピックでは走幅跳銀メダルを獲得。仁川アジアパラ競技大会(2014)では100m(T42)アジア新記録を樹立し2連覇。走幅跳、4×100mと合わせて3冠を達成した。  
100m、200m、走幅跳のアジア記録保持者。



上山容弘 氏

1984年生まれ。大阪府出身。モンパルテ所属  
2007年大阪体育大学体育学部卒業、2013年まで大学院博士後期課程に在籍。  
2005年の世界選手権で、日本人トランポリン選手初のメダリストとなり、2006年には世界ランキング1位に。  
2007年の世界選手権で2大会連続のメダルを獲得し、北京オリンピック出場を決めた。2大会連続出場となったロンドンオリンピックでは、5位入賞を果たす。仁川アジア競技大会(2014)では個人で銅メダルを獲得した。

16:10

}

17:00

シンポジウム 2

「体育・スポーツ教育の未来」

司会:土屋裕睦(大阪体育大学教授)



司会 土屋裕睦



池上 正 氏

1956年生まれ。大阪府出身。大阪体育大学11期卒業後、大阪YMCAで指導。02年、ジェフユナイテッド市原・千葉に育成普及部コーチとして加入。2010年1月にジェフを退団。同年春より「NPO法人I.K.O市原アカデミー」代表としてスクール運営。千葉大学教育学部、東邦大学理学部、東京YMCA社会体育専門学校で非常勤講師を務めた。2012年京都サンガF.C.ホームタウンアカデミーダイレクターに就任。2015年1月より同クラブ育成普及部長に就任。



山口 香 氏

1964年生まれ。東京都出身。女子柔道競技の先駆者として活躍。  
競技引退後は大学で教鞭をとるかたわら指導者としても活動。  
現在は、筑波大学体育系准教授、日本オリンピック委員会理事として柔道のみならずスポーツの普及発展に努めている。

閉会の挨拶

藤本淳也  
(大阪体育大学教授/  
大阪体育大学開学50周年記念シンポジウム実行委員長)

17:00



## 「体育・スポーツの夢と未来」

柳本晶一 一般社団法人アスリートネットワーク理事長

大阪体育大学開学50周年、おめでとうございます。また、この度はその記念シンポジウムの特別講演にお招きいただき、誠にありがとうございます。今日は、私のバレーボールのチーム作りや選手の育成法をお話しすることによって、体育・スポーツそしてその活動に関わっている皆さんへのエールになればと思っています。

### 勝つチームを作るために

バレーボールがオリンピックの正式種目になったのは1964年の東京オリンピックです。ここで女子バレーは初出場でありながら金メダルを取りました。そして、それから24年間、メダルに絡まない大会はないくらい世界のトップをずっと走り続けました。ところが、ロサンゼルスオリンピックの銅メダルを最後にどんどん凋落していきました。まさに「山高ければ谷深し」という言葉のように、いろんな対策を講じてもなかなか下げ止まりにならず、ついには2000年シドニーオリンピックの出場権を逃してしまいます。我々の世界では、4年間のスパンで強化に取り組みますので、次のアテネ大会へ向けての強化は進められました。しかし、2002年にドイツで行われた世界選手権で1度も勝てず16位（最下位）になりました。当時の監督は更迭され、監督を選出する強化委員会も解散になりました。監督の人事が空転する中、2003年に入って私に白羽の矢が立ったのです。非常に厳しい状況でしたので悩みましたが、バレー界に恩返しをしたいという思いから引き受けました。



当時の全日本チームの成績は本当によくなかった。しかし、私はチームの成績と選手の実力はイコールではないのではないかと、日本国内には素晴らしい力を持った選手がたくさんいるのではないかと常々思っていました。私は、全日本監督の前に外国を含めて4チームの監督をさせていただき、全てのチームで結果を残しました。一方で、チームが廃部に追い込まれたりするなど、どれもどん底からスタートした経験も持っていました。全日本は再起不能とまで言われたどん底の状態でしたから、自分の経験を活かせば何かできるのではないかと、思ったのです。そして、私の経験と選手の可能性の高さを信じて、引き受けることにしたのです。

全日本は結果を求められます。私は、まず目標を明確にして戦い方のルールを変えました。私も現役時代にはオリンピックも経験しましたし、世界選手権でメダルも取りました。トップで戦っているときは、誰もが自信を持ってメダルを狙っていました。それが凋落して結果が出なくなってくると、目の前のことしかなくなるんです。世界で勝てなくなったらアジアを目指すといった感じです。目の前のことしかないから、チャレンジしようとする情熱まで失われて、ましてや世界と戦う自信までも無くしてしまう。

だから、時間はかかるかもしれないですけど、目標を明確にすることによって挑戦する戦い方を変えなきゃいけないと思いました。

二つ目は、キャスティングです。1964年の東京オリンピックから私が監督となるまで約40年間、全日本女子バレーは単独チーム主体だったんです。東京オリンピックで優勝したときは、大松監督で日紡貝塚が主体でした。このやり方を根本的に変えたかった。私は、安易に日本のベストメンバーを選ぶことはしないで、結果を出せるメンバーを選びました。バレーボールは団体競技ですけど、勝つためには個人競技の側面が非常に強くなります。勝負の厳しさを知った人間を中心に置かなければ、チームは結果を残せないのです。その中心に据えたのが吉原知子、竹下佳江、高橋みゆきの3人です。

## 経験を共有する吉原選手と竹下選手

まず、吉原選手です。彼女は華奢に見えますが、世界でもトップクラスのセンタープレイヤーです。努力もするし、経験もあるし、身体能力はトップアスリートの中でも抜き出ていました。当時、そのトップアスリートが7年間全日本に選ばれていなかったのです。先ほど言ったように、全日本チームは4年間のスパンで強化しますから、1回の強化ミスを取り返すのに8年かかります。アテネ大会の時は、エントリーした12人中10人が初出場でした。オリンピック出場権を獲得することはものすごいプレッシャーとリスクを背負って強化しなければならないのです。だからどうしても吉原選手のオリンピックの経験が欲しかったのです。それから、監督はチームの全体的なコーディネートをしますが、試合中は監督の代わりになるリーダーが必要です。女子サッカーだと澤選手のようなタイプです。それは吉原選手しかいませんでした。そしてもう一つ、吉原選手の華麗なプレーは努力の賜物なのです。我々の世界では人の2倍、3倍練習するのは当たり前ですが、彼女はその倍はします。そういう選手が中心にいれば、若手はついていきます。彼女がいることによって、ものすごくいい練習ができました。

次に、セッターの竹下選手です。今、女子バレーボール選手は身長2mの時代になってきています。ここで日本が勝つには技術力しかありません。総合的なコンビネーションバレーで、それを組み立てるのがセッターです。だから、いいセッターがいるかないかで日本バレーの戦術はものすごく変わってきます。竹下選手は、背は低いですけど運動能力はものすごく高い。サッカーでもバスケットでも、実業団ぐらいのことは平気でやります。ボールコントロールのセンスがものすごくいいのです。

私は、どうしても竹下選手を吉原選手の横に入れたかった。なぜなら、竹下選手も挫折をしているからです。彼女はシドニーオリンピックの時、第一セッターで選ばれましたが、チームが負けた途端に批判の矢面にたたされました。精神的には非常にタフな選手ですが、さすがに一人では続きません。結局、彼女はユニフォームを脱いでバレー界から去ってしまいました。そして、1年ほど経って、2部リーグのチームでしたがバレー界に帰ってきていました。竹下選手は、このような状況を乗り越えてきた選手だったのです。

少し私自身の経験もお話しします。私も、現役時代に8年間ほど全日本のユニフォームを着て、世界選手権でメダルを取りました。でも、私は控えの選手でした。所属していた新日鉄というチームはリーグを何連覇もした日本のトップのチームでした。日本一のセッターだと言われたこともあります。でも使ってもらえなかった。当時、エースセッターには猫田勝敏さんがいました。若い時から猫田さんにはポイントポイントで非常に良いアドバイスをいただいていた。その中で、「晶一、どんな訓練して技術が伸びても、最高120点までしか伸びへん。でも、世界と戦うんやったら150点いる」って言われたのです。あれだけ朝から晩まで練習して、120点まで伸ばしてもまだ「30点足らん」と言われたのです。「その30点は何なのですか」と聞いたら、「そら、人間力や」って言われたのです。そこで気づいたんです。「訓練はいつか終わ



るけど、その後にはいろんな理不尽なことが起こる。そういうことをあきらめずに乗り越えて行くことで身につく30点があって、そこで初めて磨いてきた120点が光ってくる」と。

当時は、6時間の練習の中、控えは最後の15分しか練習時間がありませんでした。でも、猫田さんの一言で、「15分練習させてもらえるやないか」って思えるようになり、15分をものすごく大事に使えるようになりました。5時間45分の間はボール拾いばかりでしたけど、ワンバウンドでのボール拾いは絶対日本一になってやろうと思ってやっていました。男子の場合、速くてワンバウンドでも取れませんから、跳ぶ前にじっと見て、あの人が右で踏ん張ったときはこっちが多いとか確率を計算し

ながら取り組みました。その甲斐あって、私はその後にレシーブ賞をとって日本一になりました。それから、「自分は今、世界のエースセッターを一番近いところで研究できる位置にいるじゃないか。この時間を活かそう」と思って、猫田さんの技術を徹底的に研究し、それを書いた大学ノートは25箱分くらいになりました。つまり、考え方を変えて、行動を変えることで結果を出していく、ということが「戦い方のルールを変える」ということなのです。

私が全日本の監督に就任した時にはパソコンは一台もなかった。だから情報バレーを入れていったのです。今、眞鍋政義監督がやっていますが、そこがアナリストを育てて行くスタートになったのです。このきっかけになったのは、このような自分自身の現役時代の挫折から生まれた戦い方なのです。

竹下選手の話に戻ります。私自身にこのような経験があったから、竹下選手の経験も絶対に活きる、と思って彼女に話しに行きました。批判の矢面に立たされたことがトラウマになっていましたから、固くならないような冗談を言ったりして、時間をかけて話していきました。そして、「竹下。いろんな話をしてきたから分かると思うけど、人間いうのは目標を持ったら失敗するもんや。ひどい時は挫折も経験する。もっとひどい時は心の傷も負う。そして、いろいろあって今の君がここにいる。でも何かのきっかけでひとつ踏み切ってみろ。踏み切った瞬間にどんな深い心の傷も経験に代わってしまう。そこをしっかりと考えてみる」って言ったんです。そしたら、彼女の表情がすっとゆるんで、その後に復活してくれることになりました。

## 女子選手の指導方法

私は、女子選手の指導においては大失敗をしました。女子の東洋紡というチームの監督時代に日本一になってもおかしくないメンバーの時がありました。でも、監督としてシーズン中途の就任ということもあり、全然結果を残せなかった。シーズン後に、次のシーズンへ向けて選手のひとりひとりと話をしました。選手の中には、短期間で私たちのことをこんなに見てくれていたんですかって、涙を流してくれた選手もいて、手応えはありました。でも、一週間の休みの後集まったのは4人しかいなかった。

そこで覚えたのがコミュニケーションの取り方です。結果的には、入社が決まっていた3人が加わった7人で日本一になっていきました。まず、選手の変化を見逃さないようにしました。着てくるものが変わったり、髪の毛を切ってきたりしたら声をかけたりするようにしました。メールも絵文字とかデコメール入れて。バイバイとか。

男性は論理的に説明したら大体分かってもらえますが、女性は違う。この人にどう見られているのか、

チーム内での立ち位置とか、コミュニケーションとか、周りのこともすごく大事にする。だから、男性は直線階段で1、2、3、4って階段上って行ってくれるけど、女性は螺旋階段で上り切ったと思ったら、次の時には下に戻ってきて、その繰り返しという感じですね。それを知らないと失敗します。

一生懸命コミュニケーションをとると、人間も情というものが湧いてきます。でも、指導者というのは、絶対に選手を信頼しても信用したらダメなんです。このチームの選手やったら大丈夫、という考えは監督の仕事を半分投げているのと一緒にです。バレーボールはミスのスポーツですから、ミスが多くても相手がそれ以上にミスしたら勝つこともあるんですよ。逆に、ミスの少ない完璧なバレーをしても、それ以上に相手がミスをしなかったら負けることもあります。どちらでも勝った時は喜びますが、負けた時は選手もスタッフも僕の所に来て必ず問題提起してくる。その時にちゃんと方向性を打ち出さなかったら、どんなにミーティングしても信頼はなくなってしまいます。それぐらい怖い。だから、どれだけ信頼しても信用してはいけない、と思うのです。

## 最後に

私が、ある高校で在校生に送った話を紹介します。この高校は、皆さんもご存知の通り、当時大きな問題に直面していました。そこで、私は「この高校は平成28年で100周年を迎える中で大きな壁にぶつかっている。ここで一步下がるか、一步踏み切るのかは君たちの考え次第や。君たちは時代を変えられる人間でもある。そこで、まずここにいることを誇りに思ってもらいたい」という話をしました。そしてもう一つ、「金メダルを目指さない」とも言いました。金メダルは非常識です。一部の人間しかとれません。だけど、みんな金メダリストになれる。私はいつもバレーボールで例える。バレーボールは必ず終わるときがくる。そういう時に必ずセカンドキャリアで人生の金メダリストになって幸せになっていければ良い、ということです。100周年迎えるときには、この高校は大きく変わると思います。

人生いろんな壁がある。新しいことをしようとするとき必ず「壁」にぶつかる。それでもあきらめずに逃げ出さなかったら、その「壁」は必ず「ドア」に変わる瞬間が来る。そして、その壁を何回も何回もドアに変えて乗り越えていくのが人生じゃないかな。

唯一、自分を変えられるものは自分です。人は変わらんけどね。周りを変えようと思ったら、やっぱり自分が変わらないと何も変わらない。「人生は負け勝ちや」って、よく色紙に書きます。負け続ける人生は絶対ない。負け続けた時は自分が変われるチャンスでもある。だから、そういう時は必ず踏み切って、割り切って、そして自分を磨いてほしい。

今の高齢化社会でスポーツは社会への関わり方を変えていかないといけない。スポーツの意味や役割が変わってくることがあると思います。ここにお集まりのみなさんは、その変化の中で非常に重要な役割を担っている。目標や夢を持って歩む責務があると思います。

ご清聴、ありがとうございました。

### <講師プロフィール>

1951年生まれ。大阪府出身。  
1976年モントリオールオリンピックバレーボール4位。  
1980年第15回日本リーグから第18回日本リーグまで新日鐵選手兼監督、1997年第4回Vリーグから第8回Vリーグまで東洋紡オーキス監督、2003年アテネ・北京オリンピックバレーボール全日本女子チーム監督、2004年アテネオリンピック5位、2008年北京オリンピック5位。  
2012年一般社団法人アスリートネットワーク理事長、2013年大阪市教育委員会事務局顧問（桜宮高等学校改革担当）。

シンポジウム  
1

## 「スポーツ科学と競技力向上の未来」

司会

梅林 薫

大阪体育大学教授／トレーニング科学センター長

シンポジスト

平野裕一

国立スポーツ科学センター副センター長／スポーツ科学研究部主任研究員

山本 篤

本学大学院生／パラリンピック陸上日本代表／スズキ浜松アスリートクラブ所属

上山容弘

本学大学院修了生／オリンピックトランポリン日本代表／モンバルテ所属

### シンポジストによる自己紹介

梅林 ※敬称略

本日のテーマであります「競技力向上とスポーツ科学の未来」にふさわしい三名のシンポジストをお招きしております。まず三名のシンポジストにそれぞれの立場でお話していただきます。それでは平野氏、よろしくお願いいたします。

平野 平野でございます。JISSというのは国立スポーツ科学センターの略称でございます。まずはJISSの競技力の向上への貢献について話をさせていただきます。JISSの役割は、JISSは競技力向上のための医科学支援（サポート）と、そのための研究をすることです。支援といたしましては、メディカルチェックや外来の診療、ケガや病気の選手への対応、リハビリテーションがございます。それから専門的なところで、栄養、心理、トレーニング、最近は情報、映像の技術の

支援もしています。

そして、支援の中では、運動生理学やバイオメカニクスといった人たちが、競技の課題を測定したり分析したり、研究したりしています。この研究には、「主要研究」、「課題研究」、「競技研究」というのがございます。主要研究は、JISSのハードやソフトの強みを生かした、JISSが取り組むべきテーマを選び行う研究です。課題研究は、個人あるいはグループが自由な発想で研究するというものであります。競技研究は、競技団体のニーズに答えたり、あるいはJISSのほうからニーズを出して、それに基づいた研究をしたりしています。サポートでは、医科学の見聞や手法を活かした啓発研修や講習会をしたり、測定分析を行って、指導者や選手に、その先のトレーニングするときの判断材料を提供したりしています。

具体的には、競技団体からのリクエストの中で我々ができることを構成して対応しています。例えば、トレーニングの指導や練習中の映像、動作の分析、体のケア、試合中のレース分析などいろいろです。現在、60ぐらいオリンピック種目、競技団体がありますが、そのうち40強のサポートを行っています。我々はこの研究とサポートを一体化しようと考えています。つまり、主要研究や課題研究から、支援、競技研究で使えるものを作り出し、それを競技団体の強化現場へ持って行ってトレーニングに役立ててもらおう一方で、強化現場から研究課題を抽出して、支援や競技研究を行います。また、そこで解決できないものがあれば、



主要研究や課題研究として取り組むという流れにしています。

次に、我々がどのように国際競技力の向上に貢献してきたかについてですが、一つは各競技団体の要望に応じたサポートだと思っております。多分野のスタッフがおりますので、いろいろ分野と連携してその競技力の向上に貢献してきたのではないかと思います。

二つ目は、競技団体のスタッフができない部分を補完してきたという役割もあります。そして、他競技をサポートしておりますので、ある競技での成果を他の競技に活用してサポートすることもできました。

一方で課題も多くございます。40以上の競技団体のサポートに携わっておりますので、マンパワーが不足しているかなと思います。我々のところの人数を増やすのは難しいものですので、外部機関、例えば、大学、地域のスポーツ科学センターとのさらなる連携が必要だと思っております。

また、指導者との更なる連携強化も課題です。我々はサポートのプロですが、競技についてはアマチュアが多いので、それでトップサポートをやるとういってなかなか分からないところも出てきます。そういうところで実際にプロである指導者と、もっともっと連携してやらなければならないという風に思っております。例えば、コンディションのサポートをすとか、トレーニングのサポートをするといった時には、指導者が解ってやっていただかないと全く意味がない訳ですね。コンディションチェックしても、その後の練習でコンディションが悪いような状況に持って行ったら、そのことは全然活きないわけです。

最後の課題は、研究支援のマネジメントです。40以上の競技団体もサポートしていると、全てに目が行き届かず、それぞれ差異が生じるわけです。そこをもう少しマネジメントしないと、それぞれの競技に役立つものにはならないのではないかと思います。

**山本** スズキ浜松アスリートクラブに所属してお



ります、山本篤と申します。現在、大阪体育大学大学院にも在籍しており、社会人と大学院生の両方の立場で、研究と仕事を兼ねて競技をさせていただいております。私は義足で陸上競技をしており、主に100メートル、200メートル、走り幅跳びをやっています。その中でも100メートルと走り幅跳びの競技力向上というところで、年次の最高記録と、私自身がどのくらい世界最高記録に近づいているのかを表を使ってお話したいと思います。

これが100メートルの私自身の記録の推移ですが、横軸が年度で縦軸が記録になっていて、下が12秒00で、上が15秒になっています。赤線がその年度の世界最高記録で、青線が私の記録です。私は2002年から始めて、当時は17秒36という記録だったので、この表からはかけ離れたところからのスタートになっています。

私は専門学校生で、そこで陸上競技用の義足と出会って陸上競技を始めました。そこから2年たつてすぐに14秒台までは縮まりましたが、それ以上なかなか上がりませんでした。そこで、自分の競技のことで自分の身体のこと、トレーニングの効果を最大限に発揮するにはどうしたらいいのかということを学びたくて、2004年に大阪体育大学に入学しました。2004年はアテネパラリンピックの年でしたが、0.1秒足りなくてアテネに行くことができず、すごく悔しい思いをして大学に入ってきました。そのため、2008年の北京パラリンピックには絶対に出るんだという気持ちで、大学4年間頑張りました。記録が伸びなかった年もあり

ますが、4年間で約1秒伸ばすことができました。現在、義足の開発はどんどん進んでいますが、2007年には義足の仕様を変更して一気に記録が伸びました。

2008年には大学を卒業してスズキ浜松アスリートクラブに所属することになりましたが、やはり社会人になった1年目というのは厳しい年であって、環境が変わったことによる精神的なストレスを感じたり、うまく適応ができなかったりで、良い結果を残すことができませんでした。北京パラリンピックの時にも100メートルでは失敗をしまして、ものすごく悔しかった思い出があります。2010年には、自分の競技力をもっと向上させるために大学院に入学したところ、記録が順調に伸びてきています。2011年にも義足の仕様を大きく変更をしました。現在、2020年に向けてたくさんの日本企業が義足の開発を始めています。私自身義足がないと、陸上競技ができませんので、義足の仕様の変更をしながら、自分の体を鍛えて記録の向上を目指しています。

次に走り幅跳びです。青線が私の記録で、赤線が世界最高記録です。2013年は、世界ランキング1位になることができ、この年の世界選手権では金メダルを取ることができました。こちらも順調に記録を伸ばしていますが、ものすごく大きく変化がありました。当初、私は義足で走り幅跳びをするときには、足のある方で踏切をする方がよいと思っていました。ある時、たまたま義足で踏み切らないとファールになってしまうというときがあったんですね。その時にたまたま義足で跳んだら5メートル35くらいの記録が出て、一気に80センチくらい伸びました。その時には理由が分からなかったのですが、後になって義足で跳んだらより跳べるんだ、ということが分かって、そこからはずっと義足の方で踏み切っています。

現在は、2012年の6メートル24が自己最高記録ですが、世界最高記録の6メートル50を目指しています。同じように、2004年に入ってから少しずつ上がっていった、北京パラリンピックの時に銀メダルを走り幅跳びでは取ることができました。

ところで研究と競技力向上についてですが、私は2007年ぐらいから、自分のデータを取ってきました。義足の陸上競技選手に関する先行研究を探しましたが、そのほとんどは「歩行から走行へ」という導入の研究でした。参考にできる文献がなかったため、記録がほとんど変わらない女子大学生のデータと比較しながら、私自身がどこに気を付けてトレーニングをしていく必要があるのかを考えました。それと同時に2007年からずっとデータを取っていますので、その時々の変化を見ながら、縦断的に比較をしてきました。その中で私の意識を大きく変えたのは、義足から健足にいくときのストライドです。

歩幅が、義足のほうが最初は短かったのですが、義足が使えるようになってきて、速く走れるようになって来ると同時に、義足の方のストライドがより長くなってきたということが分かりました。去年はそれをもっと有効活用するために、義足で跳ぶ意識、より進ませる意識をもってトレーニングをしたところ、自己ベストを0.1秒更新することができ、研究データがトレーニングに関係していることを痛感しました。今年は健足の動きを変えて、記録を向上させていきたいと思っています。

**上山** 本学卒業生の上山容弘です。まず、トランポリンとはどういう競技なのかを少し紹介したいと思います。トランポリンというのは、採点方式で競技が行われます。近年では、跳躍の高さ（跳躍点）も加味されるようになり、跳躍点、演技点、難度点の3つの合計点数で競われます。

私がなぜトランポリンを始めたかということ、両親の影響が大きいです。私の両親もトランポリンをずっとやっていたので、生まれた頃からトランポリンに慣れ親しんでいましたし、私自身トランポリンを跳ぶのが大好きだったので、競技を続けてきました。今回のテーマは競技力向上の経緯なので、大学に入ってから話をしたいと思います。私はどうしたらトランポリンがうまくなるのかを考えていく中で、どんどんスポーツ科学に興味を持ち出しました。そこで、本学の体育科教育



コースに入学し、スポーツ科学によるトランポリンの分析に関する卒業論文を書きました。

競技成績は、2005年に日本人で初めて世界選手権で金メダルを獲得し、また、日本人初の世界ランキング1位という成績を残すことができました。しかし、北京オリンピックの前年の2007年、私自身は北京オリンピックの出場権を獲得していたのですが、ずっと二人三脚で競技を続けてきた父親が他界してしまいました。そのため、代わりのコーチをつけようとも考えたのですが、経済的・時間的な問題もあり、自分自身をコーチングしながらオリンピックを目指さなければならない状況になりました。

当時はまだ自分自身の指導力、自己分析力が弱く、北京オリンピックでは9位という悔しい結果に終わりました。その後も、経済的な理由からこのままのスタイルを継続するしかなく、自分自身をコーチングして結果を出さなければならないと考えました。また、本学の大学院で勉強していたということもあり、スポーツ科学によって得られた知識をトランポリンに活かすことを考えながら、トレーニングに励みました。その結果、2009年、2010年の世界選手権でも個人で銅メダルを獲得することができ、自信を持てるようになりました。博士課程に進学したときには、大学のトランポリン部が部員数不足のため活動できない状況になってしまったため、活動拠点を東京のナショナルトレーニングセンターに移すことになりました。その当時はスポンサーがいたので、経済的には不自

由なく練習をさせてもらっていたのですが、2011年3月にスポンサーの打ち切りにあって以降は、貯金を切り崩しながらロンドンオリンピックを目指しました。その中で、JOCが行っているアスリートナビゲーションという就職支援に参加しながら、就職先を探したりすることも競技に加えてやっていました。ロンドンオリンピックでは5位という結果で終わりましたが、現在も引き続きナショナルトレーニングセンターで練習を続けています。今年の世界選手権がリオデジャネイロオリンピックの出場権を獲得する大会となりますので、そこに向けて練習を行っています。

## 苦勞した点や工夫など

**梅林** どうもありがとうございました。それでは、3名のシンポジストの方に質問させていただきたいと思います。まずは平野氏に、スポーツ科学サポートでの成功例や苦勞した点をお聞きしたいのですが、いかがでしょうか。

**平野** やはり、競技によってサポートのし易さは異なります。陸上やウエイトリフティングといった記録で勝負する競技は割とやり易いですし、成功している部分も多いです。逆に、採点系の競技は難しいです。

また、指導者がすごく医科学的な知見をもっていらっしゃるフェンシングや競泳などは、我々にどんどんリクエストしてきますし、意見を求めてきます。それから、陸上やバドミントン、スピードスケートなど、医科学スタッフとは協力体制ができているところとは、うまくやっているとしたいと思います。

その裏返しとして、科学は万能ではないですから、何でもやってくれよと言って過剰の期待をされている時にはうまくいきません。それともう一つは、サポートのプロとしての領域を乗り越えてしまう場合が時としてあります。例えば、コーチングですね。それは我々の役目ではなく指導者の役目なのです。その場合もサポートとしてはうま

くいきません。

**梅林** ありがとうございます。指導者との理解が非常に重要なところだと思います。それでは、山本氏、上山氏にも少しお聞きしたいと思います。大阪体育大学での競技生活の中で、自分の競技力向上のために工夫したことや、大変だったことを聞かせてください。

**山本** 私が陸上部に入部した当初は、ものすごく大変でした。周囲の人は義足の選手を見るのが初めてだし、私は21歳で入学したので年齢も違うし、ということで、最初は大変だったのですが、たくさんコミュニケーションを取っていくことで、その壁を乗り越えることができました。ただ、もう一つ壁がありまして、最初は男子の選手と一緒に練習していたのですが、大学生ですと30メートル走るだけでも、ものすごい差がついてしまうんですね。夏くらいまでは男子と一緒にやっていたのですが、いろいろ考えていくうちに、やはり女子の記録が結構似ているので、女子と一緒に練習した方がいいのではと思うようになりました。私は女子に負けてたまるかという気持ちもありますし、たぶん女子は足がない奴に負けてたまるかという気持ちもあって、その結果良い相乗効果が生まれました。基本的には男女同じメニューですが、やはり記録が違うので、その部分はいろいろと工夫しました。

**梅林** ありがとうございます。続いて上山氏、お願いします。

**上山** 一番苦労した点は、やはり大阪体育大学で活動ができなくなったこととコーチの不在です。コーチがいなくなってからは、ビデオカメラを使って自分の演技を確認して、どこが悪かったか良かったかをフィードバックしながら練習していました。また、大学では多目的体育館で練習していたので、2時間半という時間制限がありました。練習した映像を自宅に持って帰って、その足りない部分を頭の中でイメージトレーニングするとい

うような工夫もして、練習量不足を補ったり、技術の向上に努めたりしました。

## リオデジャネイロオリンピック、東京オリンピックに向けて

**梅林** 2016年にはリオデジャネイロオリンピック、それから2020年には東京オリンピックがあります。それに向けてのJISSの活動、例えばNTCとの連携や方向性、新しいプロジェクトなどはございますか。平野氏、よろしくお願いします。

**平野** 東京オリンピックが決まり、いろいろところで叫ばれていますが、ジュニアアスリートをどのように育てていくか、ということが重要です。我々はこれまでにトップ選手の情報、例えば体力的データなどを取ってきましたので、それをどんどん発信をしていこうと考えております。そして、パラアスリートのサポートも我々の仕事になりました。まだ我々にノウハウはありませんが、これまでサポートしてきた日本パラリンピック協会と連携して、良いサポートを作っていきたいと考えております。

**梅林** ありがとうございます。それでは山本氏と上山氏に、今後のオリンピック・パラリンピックに向けての展望や取り組みについてお聞きしたいと思います。いかがでしょうか。

**山本** 2008年の北京では走り幅跳びで銀メダルだったので、2016年のリオパラリンピックでは金メダルを目指したいです。100メートルでもメダルを取れる位置に行きたいと思っています。また、2020年東京が決まる前まではリオで終わりかなと思っていましたが、せっかくですので、現役選手として東京も出られればと思って、現在やっています。2012年くらいからは、ナショナルトレーニングセンターも使えるようになって、合宿が充実してきました。それと同時に、JISSも使えるようになり、研究データを取ったり自分自身のデー

タを取ったりしてやっています。科学的知見を入れることで、これからやっていかなければならない正しい方向性が見えると思うので、これからも活用していきたいと思っています。

**上山** 私はリオデジャネイロオリンピックが集大成と思って練習を行っています。さすがに2020年の東京オリンピックは現実感が全くありませんし、5年後の東京オリンピックを目指すよりは、リオデジャネイロオリンピックを最終地点において、全力で頑張っていきたいなと思っています。

私は今、ナショナルトレーニングセンター、JISSで練習をしていますが、そこでは様々なサポートを受けることができます。まず一つには、トレーニング施設です。トレーニング体育館でトレーナーについていただきながら、トランポリンに即したトレーニングと一緒に考案しています。レストランには管理栄養士がいて、栄養価計算をお願いすることができるので、日ごろのコンディションのチェックや食事の取り方を聞きながら生活しています。また、JISSでスポーツ科学の研究実験もさせていただきました。その時には平野先生にお世話になりました。それらを活用しながら、競技力の向上に努めています。

## アスリートからのJISSへの要望

**平野** 今後、JISSはどうあって欲しいか、アスリートの立場から意見を聞かせてください。

**山本** 新しいプロジェクトが立ち上がっていますので、今後できるようになるとと思いますが、パラアスリートにも動作分析をしてフィードバックしていただくのが一番の魅力的だと思います。あとは、やはりオリンピック選手が培った知識をパラ選手にも落とし込んでいただけると、パラ選手の競技力向上にも役立つのではないかと思います。

**平野** ありがとうございます。是非。上山さんいかがですか。

**上山** 今、JISSの研究員は4年ないし5年という契約期間ですが、受け持ったデータを引き継いでくださっているとは思いますが、それを協会にフィードバックしていただくのにすごく時間がかかる印象を受けるので、今後少し改善していただければと思います。

**平野** ありがとうございます。

**梅林** 平野氏、今の件についていかがでしょうか。

**平野** はい。山本さんからのリクエストは、動作分析も大丈夫です。知識の伝達も、これから何回かパラ選手にやっていくという計画になっていますから、ご安心ください。一方、きついところを突かれたなと思ったのが上山さんの方で、我々としては、できるだけ滞りの無いようにやりますので。

## 最後に

**梅林** 向上を含めて体育系大学にはどういうことが期待されているか、一言ずつお願いします。まず、平野氏、よろしくお願いします。

**平野** 立場上、競技スポーツとして望むところとさせていただきます。一つは、最近の大学の研究は、ものすごく細かいところに入り込んでいます。その中であっても、競技を視野に入れて研究していただきたい。そして、競技者、あるいは競技チームに寄り添うような研究者を育成していただきたいと思います。

もう一つは、指導者になれる方もたくさんいらっしゃると思います。スポーツ医科学を理解して、その上に立脚した指導のできる姿勢をお願いしたいと思っています。もちろん、それがすべてではありませんが。

最後に、当然大学にもジュニアアスリートは多くいらっしゃると思いますので、ジュニアアスリートへの医科学サポートをお願いしたい。今日お話ししましたが、トレーニング指導や栄養、心理、

リハビリ、映像技術などの専門的な仕事をする方のジュニアサポートの中での配置を考えていただけたらなという風に思っております。

**山本** 私が入学する時に、パラリンピック選手が推薦入試で体育系大学に入学するのは初めてだということで新聞に取り上げられ、その後に障がいを持った選手が陸上部にたくさん入ってくるようになりました。これはものすごくうれしいことですし、全国の体育系大学でもそういう動きになってくれればうれしいです。現在、パラリンピック選手も将来を見据えて大学に行きながら陸上競技や水泳をしている選手が増えています。なかなかパラリンピック選手に門戸を開いた大学はまだ少ないので、体育系大学には対応していただきたいと思います。トップ選手になれば医科学的なサポートはJISSなどでやってもらえるとは思いますが、これからトップを目指すというジュニア選手にはできませんので、各体育系大学でサポートしていただくと強い選手が輩出されると思いますので、ぜひお願いしたいと思います。

**上山** 体育の教員免許を取ることは数多くの大学がやっていますが、体育系大学の魅力はやはり、学生の大半がアスリートであることだと思うので、アスリート同士で意識を高め合っていくことだと思いますので、頑張ってくれたらと思います。

**梅林** はい、ありがとうございました。最後のところのお話がありましたように、スポーツ科学と、競技力向上、アスリートを両方兼ね備えたところが体育大学の一つの役割でもあると思います。今回、日本または世界のトップで活躍されている皆さんに、競技力の向上そしてスポーツ科学のサポートの在り方について、貴重なお話をいただきました。実は現在大阪体育大学には、附置施設としてトレーニング科学センターと呼ばれる施設があります。私はそのセンター長をしておりますけれど、まさにストレングス、コンディショニング、アスレチックトレーニングといった専門的な測定や、またはトレーニングに関してのプロジェクト研究などの事業を行っております。今日のお話をお伺いしまして、我々のそのトレーニング科学センターも含めて、関西地域における競技力向上における、西のJISS的な役割を、少し大げさかもしれませんが、地域との連携を図って担っていくことが大事なのではないかなと感じました。

最後になりましたけれども、本日、3名のシンポジストの方からいろいろなお話を伺いまして、上山氏、山本氏の今後の活躍を、そしてそれを支えていくJISSの平野氏のご活躍を期待しまして、これでシンポジウムを終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。もう一度盛大な拍手をお願いしたいと思います。



シンポジウム  
2

## 「体育・スポーツ教育の未来」

## 司会

土屋裕睦 大阪体育大学教授

## シンポジスト

池上 正 本学卒業生／京都サンガ F.C. 普及部長

山口 香 ソウルオリンピック柔道女子 52kg 級銅メダル／筑波大学体育系准教授

## シンポジストによる自己紹介

## 土屋 ※敬称略

皆さんこんにちは。私ども大阪体育大学の開学50周年の記念行事にこのようにたくさんお集まりいただき、ありがとうございました。プログラム2つ目のシンポジウムのタイトルは「体育・スポーツ教育の未来」でございます。新しい時代の到来を見据えて、次の三つのことについてお話ししていただきたいと思います。

一つは「体育・スポーツ教育の現代における課題とは何か」。そして、それを受けて私ども「体育系大学はどんな役割を担うべきか」。最後に「体育・スポーツの力」について期待あるいは夢のある話をお聞きしてみたいと考えております。

最初に、シンポジストのお二人から普段コーチングで考えておられる事などをお話いただいたのちに、この三つのテーマについて話を深めていきたいと思います。では最初に池上先生にお話をいただきたいと思います。池上先生、どうぞよろしくお願いいたします。

池上 よろしく申し上げます。ただいまご紹介いただきました池上です。私は元ジェフにいましたので、千葉市、市原市で年間190校65,000人くらいの子供たちを8年間教えてきました。小・中・高校だけでなく、千葉大学で非常勤講師や、社会人にも教えました。

今の日本スポーツ界を見ていると、小学校で起きている課題がずっと続いていると思っています。



私は、楽しくないとスポーツじゃないと思っています。ほんとに楽しいと思えるスポーツを実践しようと小学校を回っています。一番大切にしていることは自分で考えて自分でやることです。大学のテニスの授業でも、私は何も教えません。二人でボレーをしてくださいというと、「えっ、先生、ボレーってどうするんですか」「いや、テニス見たことないの。二人でこう打ち合うでしょう。やっごらん」というとやるわけですね。「交代。次の人」というと、最初にやったできない学生達が後ろで一生懸命練習します。私の研究課題は、指導しなかったらどんなスポーツ選手が育つのかです。順天堂大学の大学院でもそのような話をさせていただきました。本当に自立した選手を育てるためには、日本はもっと変わらなければいけないと感じています。

土屋 「自立」というキーワードをいただいたよ



うに思います。ありがとうございました。続きまして、もう一人のシンポジスト、山口香先生です。

**山口** まず、大阪体育大学開学50周年、誠におめでとうございます。私も50歳で、東京オリンピックの年の生まれです。私は、日本の体育・スポーツというのは1964年の東京オリンピックで変わったと思いますし、2020年東京オリンピック・パラリンピックでも何か変わるのではないかと期待しています。先ほど、池上先生が「スポーツは楽しい」とおっしゃいました。残念ながら柔道競技は楽しいことが少ないです。投げられて楽しい人はいないですよね。私も柔道をやってきて楽しかった思い出はあまりないので、スポーツは楽しいよとは簡単に言えません。

私は「成功体験をさせる」ことを大事にしています。我慢や苦しい思い、あるいは負けることで学ぶことはたくさんあります。でも、自信は勝つことや乗り越えることでしか得られないと思っています。何か成功して褒めてあげることで選手たちの自信になり、次の挑戦に繋がる。それがコーチの役割だと思いつつ柔道を教えております。

#### テーマ1

### 「新しい時代の到来を見据え、体育スポーツ教育の課題は何か」

**土屋** 「体育・スポーツ教育の未来」について、三つの視点を考えてみました。一つ目は「新しい

時代の到来を見据え、体育スポーツ教育の課題は何か」です。早速、お二人のシンポジストに伺ってみたいと思います。

体育・スポーツ教育において、高校運動部員の自死の背景に顧問の暴力問題がありました。さらに驚いたのは全日本女子柔道のナショナルチームでも体罰問題があったと報道されました。スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）が開催され、私も委員として参加し、この問題をどのように考えるか、日本のスポーツ界をどのようにしていくかということをお話し合いました。この体罰根絶の話題は避けて通れませんので、是非、お二人のお考えを聞きたいと思います。今抱えている体育・スポーツ教育の課題について、どのようにお考えでしょうか。

**山口** 体育・スポーツにおける体罰では、女子柔道ナショナルチームの中でもあったということで、私も深く関わりました。これが社会的な問題となって、日ごろからスポーツを指導されている方々にご迷惑とご心配をおかけし、非常に責任を感じています。

ただ、私は女子柔道ナショナルチームの件でいろいろな発言をしましたが、誤解があってはならないので言っておきます。私は全日本女子柔道の選手たちが体罰を受けていたことに対して怒ったというよりは、私がものを申したのは、ナショナルチームのレベルで、「体罰をしなければ選手が頑張れない」ということが信じられなかったのが最初なんです。金メダルを目指す日本のトップ選手が、殴られなければ一生懸命やらないというのはレベルが低過ぎます。トップ選手なら勝ちたい思いが強いですから、やらせるよりは練習のやりすぎをコントロールするのが監督やコーチの役目なんです。

また、柔道でどんなに強くても、畳を降りて自分より上の人に意見が言えなかったら、強くなっても全く意味がありません。スポーツを通して強くなるということは、単にスポーツの場面で強いということではなく、人間として強くなることだ

と思うんですね。それがスポーツの価値だと思います。

そして、スポーツには必ずルールがあります。選手にはルールを守れと言いながら、一方で監督が暴力はいけないという社会のルールを破っては、選手はスポーツをやる意味が分からなくなってしまいます。私たち指導者がなぜダメなのかをもう一度考えなければならぬと考えております。

**土屋** 池上先生はいかがお考えでしょうか。

**池上** 小学校で体育や家庭科を専科にした方がいと長い間言われ続けていますが、未だになっていません。小学校で「気をつけ」、「前にならえ」って、全員やっていますよね。実は、ドイツの小学校で「気をつけ」、「前にならえ」、「集合」と言ったらクビです。どうしてかお分かりですか。全て体罰に繋がるからです。だからやらなくなりました。日本では未だにそのようなことが沢山残っています。それでは日本が変わるはずがないと思います、私は小学校を回り、「体操なんかいらねえですよ。みんなで鬼ごっこしましょう」といってやっていました。関西ではほとんど知られていませんが、関東ではプロジェクトアドベンチャーという冒険教育が入り始めています。50周年を迎えて、大阪体育大学も変わればと思っています。

## テーマ2

### 「体育系大学はどんな役割を担うべきか」

**土屋** 大阪体育大学のこれまでを少しお話ししたいと思います。教育、研究、競技力向上、そして社会貢献が本学の使命ですが、例えば、教育においては、体育・スポーツ指導者の養成の拠点として、非常に特色ある教育を実施でき、多様な進路の開拓、特に教員採用につきましては30人以上の現役合格を達成しております。

また、研究に関しては、スポーツ科学の研究拠点として、2014年11月には日本スポーツ心理学会のフォーラムを本学で主幹しましたし、2015年3

月には日本コーチング学会大会を開催するなどの活動をしてきました。さらに、競技力向上においては、コーチングの最前線として非常に多くの運動部が活動し成果を収めています。そして、社会貢献としては、地域の方の体力向上や中高齢者の健康づくり、子供たちのスポーツキャンプのお手伝いなどもしています。

体育系大学の担うべき役割が多様化してきていると思いますが、山口先生はどのようにお考えになりますか。

**山口** 最近は勝ち負けだけではなく、見るスポーツであったり障がいを持つ方のスポーツであったり、非常にスポーツが多様化してきていると思います。体育系大学や体育系の学部はそういった多様なスポーツに対応できる人材の輩出が求められていると思います。

また、スポーツは世界に共通する一つの教養だと思っています。スポーツには言語や宗教を超えてお互いに共感できる力があります。今のグローバル社会においては重要な文化の一つです。そのようなスポーツの力を発信していく役割を担っていかねばならないと思います。

**土屋** ありがとうございます。池上先生どうでしょうか。

**池上** 山口先生がおっしゃった通り、体育系大学生は他の種目にも精通するべきだと思います。トップアスリートはどんなスポーツもできますし、どんなスポーツも好きです。私が市原市にいたときには、町のスポーツ全体をコーディネートする人を考えてはどうかと市長とお話したことがあります。スポーツをしている人達がそんなところで力を発揮する時代が来るのではないかと考えていますので、自分の種目以外にも目を向けていただけたらいいかなと思います。

**土屋** 池上先生、大阪体育大学は4月から教育学部を新たに誕生させ、そこでは体育・スポーツの

素養・知識を持った小学校教員の輩出を目指すことになりました。何かお考えやアドバイスをいただけないでしょうか。

**池上** 先ほど少しふれましたが、小学校教員は体育の授業でラジオ体操や、「1・2・3・4」と大きな声をだしなさいとかやっているわけです。私はオーストリアで小学校の教員の鬼ごっこを見ました。子供達に説明したら教員はもうその場にいません。楽しむのは誰かということです。私が考える教育は、右・左と指示するのではなく、環境を整えてあげることだと思います。ある練習を持って来たらその中で選手達が自ら学んで獲得していく、それが合わなければ違う練習を用意してあげるのが指導者だと思います。「こっちの方がいい判断でしょ」というのは指導者の思っていることで、選手達は違うということですね。それが絶対に正しい訳じゃない。

スポーツあるいは教育の本質とは何か、先生の言いなりの子供を育てるのか、先生の目標に子供を当てはめるのか、といったことを勉強していただけたらいいのかなと思います。

**土屋** 教育の本質というテーマをいただきました。山口先生は筑波大学の体育系にお勤めです。様々な大学がある中で、体育系大学がやらなければならない役割とは、どんなことがあるのでしょうか。

**山口** 私達体育系の教員は、体育・スポーツの価値を十分に理解し、その価値を体現して多くの人達に伝えていくという役割があると思います。勝つことも大事ですが、その過程で何を課題とし、克服していくか、どうやって自分を高めていったのかを伝えていく必要があると思います。そのために、体育系の大学や学部は、体育・スポーツを競技だけにとどまらず、専門的に学んでいるわけで、そこに一般的な総合大学と明確な違いがあると思います。そこにプライドをしっかりと持って発信していくことが重要だと考えています。

### テーマ3

## 「体育・スポーツの力」

**土屋** ありがとうございました。2020年には東京オリンピック・パラリンピックが行われます。新しい時代の到来を強く感じる中で、「体育・スポーツの力」への期待について、先生方からご意見をいただきたいと思います。池上先生、どうでしょうか。

**池上** サッカーの世界ではよく「サッカーは子供を大人にし、大人を紳士にする」、あるいは、「大人を子供にする」と言われます。まさにスポーツすることは紳士になることなんです。ポビー・チャルトンというイギリスのサッカー選手は、プロサッカー選手から貴族になりました。彼は現役生活の中で退場がゼロで、お酒と煙草もやりません。イギリスでは、そういう人しか小学生の指導ができないという時代がありました。あるいは、パブリックスクールの時代には、ルールを守ってスポーツでフェアに戦うことで、学校の中のいじめを無くしていく役割もあったわけです。残念ながら日本にそういうことは伝わっていません。

大学時代、ヨーロッパで勉強された先輩に、「スポーツする時の格好がちゃんとあるよ。終わったらシャワーを浴びて、綺麗にして帰らないとダメだよ」と言われました。それ以来、私はずっとブレザーを着て大学に行きました。ヨーロッパではどんなに小さなクラブでも、更衣室は絶対あるしシャワーもあります。だから、紳士になって行きます。日本はグラウンドしかない、水道もトイレもないところでスポーツしているわけです。紳士になれないのは当たり前です。でも、そのような環境に対して平気になることを許したらダメなのです。そういう子達も、こんなグラウンドではできませんと拒否すればいいんです。そういう力がスポーツには有るはずだと思っています。

**土屋** ありがとうございます。山口先生いかがでしょうか。

山口 今はもうほとんど現場を見ていませんが、指導者として選手達を見ていた時期もあります。その時を振り返って思うことは、スポーツには答えがありません。自分が一生懸命コーチングを勉強しても答えを教えられない。ここにスポーツの力があると思いますし、今の時代に必要なことだと思います。昔は良い大学に入れば良い会社に行きましたが、今は良い大学に入っても、就職先があるかわかりませんし、就職してもいつリストラに合うか分かりません。自ら判断し、その結果を自分の責任として受け止める。スポーツは、それを肌で学び社会に活かしていく力があると信じています。

## 最後に一言

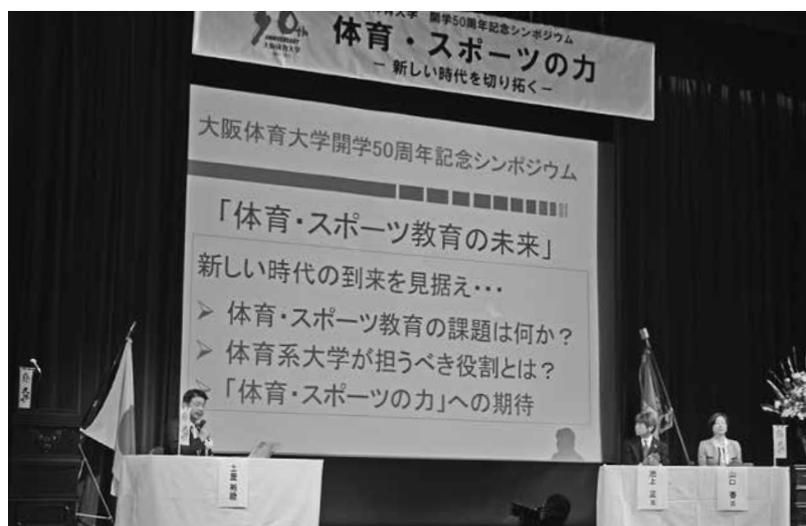
土屋 最後に、大阪体育大学あるいは体育系大学で学ぶ学生たちに対して、一言いただけたらと思います。

池上 スポーツすることの意味を十分考えて欲しいです。私が学生の頃に、ある先生に「スポーツが文化になるまで頑張らないといけないよね」と言われたことを今でも覚えています。それは、やっぱりスポーツが教育になることだと思います。

ヨーロッパではスポーツが教育だから、午前中で学校が終わって午後は地域のクラブに行きなさいという政策ができるのではないのでしょうか。日本だと昼からクラブに行ってきたさいとは言われません。どうぞここにいる人達に活躍していただいて、スポーツが文化になるように努力していただけたらありがたいなと思います。

山口 日本で体育・スポーツの学部や学科を持っている大学はどんどん増えてきていますが、大学名に「体育」のある大学は数少ないと思います。そういう大学で養成される人材は、日本の体育・スポーツを牽引して行くリーダーであって欲しいと思います。大阪体育大学には、その意識を強く持った人材を多数輩出していただければありがたいなと思っています。

土屋 池上先生、山口先生ありがとうございました。熱い熱い議論を、こんなにたくさんの方のフロアの皆さんと共有できたことを本当に嬉しく思います。次の50周年に向けて頑張ろうという気持ちです。ぜひ今後とも、大阪体育大学をよろしく願いいたします。以上をもってシンポジウム2を閉じたいと思います。御清聴ありがとうございました。



閉会の挨拶

藤本 淳也

シンポジウム実行委員長・「大体大ビジョン2024検討委員会」委員長

大阪体育大学の藤本でございます。

本シンポジウム実行委員長、および、「大体大ビジョン2024検討委員会」委員長を務めております。主催者を代表いたしまして、高いところからではございますが、一言、お礼とご挨拶を申し上げます。

本日、文部科学省・教育委員会関係各位と毎日新聞社、大阪体育大学同窓会のご協力、そして900名を超える方々のご参加により、大阪体育大学開学50周年記念シンポジウム「体育・スポーツの力：新しい時代を切り拓く」を開催することができました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

みなさん、本シンポジウム、いかがでしたでしょうか。

今日、お招きしたゲストは、日本代表チームを率いた経験を礎に、多くのオリンピックと共にスポーツ界に新風を吹き込んでいる方、最先端のスポーツ科学でトップアスリートとその指導の現場を支えている方、大学院でスポーツ科学を極め、現役トップアスリートとして活躍している方、スポーツで子供と選手の力を引き出して伸ばすスポーツの本質指導をけん引している方、元トップアスリートとしてスポーツ指導と組織のあるべき姿を訴え、指導・研究されている方、です。

私たちがゲストの皆様から感じた、スポーツ愛にあふれ、情熱的、創造的、革新的な「力」こそが、まさしく、未来を、新しい社会を、新しい時代を切り拓いていく「体育・スポーツの力」です。開学50周年を迎える年の始めに、皆様と共に、その「体育・スポーツの力」を感じ、考え、確信することができましたことは、本学だけではなく、日本の体育・スポーツ界にとっても大きな一歩を踏み出す「時代の始まり」となった、と思います。

本日、ご多忙にもかかわらず、ご登壇を賜りました柳本晶一様、平野裕一様、山本篤様、上山容弘様、池上正様、山口香様、誠にありがとうございました。重ねてお礼を申し上げます。

2015年、開学50周年。大阪体育大学は、このシンポジウムを機に、新たなビジョンを掲げ、新しい時代へ向けて、邁進していきます。「大体大ビジョン2024」、2024年へ向けての10年間の大学のビジョン、そのテーマは、「大体大力、新しい時代を切り拓く」です！

大阪体育大学は、「不断の努力により智・徳・体を修め社会に奉仕する」を建学の精神として、1965年に開学しました。本学の草創期を支えたのは、二人の偉人の「志」でした。「加藤橘夫」元学長。日本体育学会創立メンバー、1964年東京オリンピックの国際スポーツ科学会議の委員であり、我が国のスポーツ科学の基盤を築かれました。「大島鎌吉」初代副学長、1964年東京オリンピック強化委員長・選手団団長であり、体育・スポーツによって幸福で平和な社会づくりを目指し、1982年、日本人初のオリンピック平和賞を受賞されました。

私たち、大阪体育大学関係者の身体に、精神にみなぎる「大体大力」とは、建学の精神と草創期のお二人の「志」、体育・スポーツ・健康・福祉で社会の価値を創造し、社会に貢献してきた「誇り」、この二つを胸に、未来社会のあるべき姿を見据え、その実現のために、使命感をもってチャレンジを続ける「人間力」です。



これからの10年、日本では2020年東京オリンピック・パラリンピック大会をはじめ、多くの国際大会が開催されます。日本の体育・スポーツ界にとって、日本社会にとって、またとないチャンスの10年です。この機に、私たちは「大体大力」で「新しい時代を切り拓く」という強い決意のもと、幸福で平和な社会の実現を追求していきます。

そのための、3つのビジョン。私たちは、

- ・ 体育学・スポーツ科学・教育学の分野において、独創的、創造的、国際的な研究に挑戦し、新たな知を構築します。
- ・ 豊かな教養と体育学・スポーツ科学・教育学に関する専門知識を備え、確かな創造力と実践力を持ち、リーダーシップを発揮できる人材を育成します。
- ・ 体育学・スポーツ科学・教育学の研究・実践・人材の力を活かし、地域社会の活性化に貢献する拠点、および、世界で活躍するアスリートとその指導者を育成・サポートする拠点、となります。

2015年、本学は、研究・教育・人材育成をさらに充実させるための、そして、それらを活かして、教育を、地域を、健康を、生涯スポーツを、競技力を支える、世界に誇る「拠点となる」のための、新しい、具体的なチャレンジをスタートさせ、展開していきます。

大阪体育大学、まだ50周年。浪商学園および大阪体育大学の教職員、学生、関係者、そして卒業生が一丸となって「大体大力」を高め、そして、発揮し、「体育・スポーツの力」を信じて、「志」を共にするお集まりの皆様ともに、新しい時代を切り拓くため、これからの10年、着実に、進んでまいります。

大阪体育大学のこの10年間のチャレンジにご注目をいただきますよう、そして、より一層のご理解、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます、私の挨拶とさせていただきます。本日は、誠に、ありがとうございます、ありがとうございました。

#### 毎日新聞の寄稿：開学50周年記念シンポジウムに参加して

この種の会合では、評論家然とした外部のパネリストが幅を利かせがちですが、今回のシンポジウムは進行役やシンポジストを卒業生が務めるなど、手づくり感にあふれていて非常に好感を持ってました。会場が、都心にある伝統建造物・中央公会堂というのもインパクトを与えたと思います。

二部構成のシンポジウムでは、オリンピック・パラリンピック、Jリーグで活躍した大学・大学院OBの山本篤氏、上山容弘氏、池上正氏がそれぞれの経験から大学への注文と期待を語りました。その中で、池上氏の「地域のスポーツをコーディネートできる、そんな人材を育ててほしい」という言葉が印象に残りました。関西発の体育系大学として誕生して半世紀を刻んだ大阪体育大学の使命、存在価値の多くは、まさにその点にあると思うからです。ぜいたくを言えば、もう少し時間がほしかったことと、せっかく多くのトップアスリートを輩出しているのですから、もっと多くの卒業生に語ってほしかったという感想を抱きました。

時間不足を感じるほどに中身は濃かったのですが、基調講演の柳本晶一氏、シンポジスト・山口香氏のゲストスピーカー2人が、聴衆に考えさせる材料を提供して、議論の進行にめりはりをつけてくれました。柳本氏は女子バレーボールのオリンピック代表チームを率いるうえでの苦労話を下地に組織論、指導者論を展開し、山口氏は自身が見聞きした近年の柔道界の問題をあからさまにしたうえで、日本のスポーツ界が抱える問題を提起しました。人選がピタッとはまった感じです。

毎日新聞大阪本社編集局編集委員  
堂馬 隆之

〈学園・大学関係者挨拶〉



野田賢治理事長



岩上安孝学長



西尾一実常務理事

〈懇親会の様子〉



〈記念写真〉



<大阪体育大学 開学50周年記念シンポジウム実行委員>

実行委員長：藤本淳也

実行副委員長：菅生貴之

実行委員：高本恵、中山健、佐々木義卓、村元辰寛、  
井上隆幸、姫路文博、池田美保

---

大阪体育大学 開学50周年記念シンポジウム報告書

発行：2015年7月25日

印刷・製本：(株)大同印刷所

# 大阪体育大学 50年の歩み



初代学長 野田三郎  
昭和40年～昭和50年



第三代学長 列府 哲  
平成元年～平成9年



第五代学長 野田敏彦  
平成13年～平成15年



第七代学長 永吉宏英  
平成19年～平成26年



第二代学長 加藤 橘夫  
昭和50年～平成元年



第四代学長 田口守隆  
平成9年～平成13年



第六代学長 田村 清  
平成15年～平成19年

1964	昭和39年	9	大阪産業大学設置認可申請書を文部省に提出
		12	大阪体育大学に学名変更の申請書を文部省に提出
1965	昭和40年	4	大阪体育大学 体育学部設立（大阪府茨木市）
		4	第一回大阪体育大学入学式
1969	昭和44年	3	第一回大阪体育大学卒業式
1970	昭和45年	4	大阪体育大学 体育専攻科開設
1972	昭和47年	4	学校体育コース、生産体育コース、社会体育コースの3コースとなる
		6	産業体育研究所設立
1986	昭和61年	6	中国の西安体育学院と学術・スポーツ交流協定を締結
1989	平成元年	4	大阪体育大学熊取大学舎竣工
1990	平成2年	4	体育科学コース、学校体育コース、社会体育コース、コーチ教育コース、健康科学コースの5コースとなる
1992	平成4年	4	大阪体育大学大学院 修士課程（体育学研究科）開設
1996	平成8年	5	カナダのウェスタン・オンタリオ大学（UWO）キネシオロジー学部と交換プログラム協定を締結
1997	平成9年	4	体育学部 生涯スポーツ学科開設
			2学科5コース（体育科学コース、体育科教育コース、コーチ教育コース、スポーツマネジメントコース、健康スポーツ科学コース）となる
1999	平成11年	2	BOUHSEAR（ボーシャー）誕生（21世紀の本学マスコットキャラクターとして公募により決定）
2001	平成13年	4	大阪体育大学大学院 博士後期課程（スポーツ科学研究科）開設
		4	大阪体育大学診療所設置
2002	平成14年	4	トレーニング科学センター設置
2003	平成15年	4	大阪体育大学 健康福祉学部開設
			1学科（健康福祉学科）3コース（社会福祉・精神保健福祉・福祉マネジメント）制でスタート
		4	大阪ソーシャルサービス研究所設置
2004	平成16年	3	同窓会館「大阪体育大学アネックス」完成
2005	平成17年	4	産業体育研究所を生涯スポーツ実践研究センターに名称変更
2006	平成18年	4	スポーツ教育学科、健康・スポーツマネジメント学科を新設
			2学科6コース（コーチ教育コース、体育科教育コース、スポーツ心理・カウンセリングコース（日本初）、スポーツマネジメントコース、アスレティックトレーニングコース、健康スポーツコース）
		6	台湾国立体育学院と学術交流協定を締結
2010	平成22年	4	大阪体育大学健康福祉学部3コース制を廃止、スポーツ福祉系・教育福祉系・ソーシャルワーク系に再編
2011	平成23年	4	大阪ソーシャルサービス研究所を健康福祉実践研究センターに名称変更
2013	平成25年	4	教職支援センター設置

## 大阪体育大学 ビジョン2024

### 「大体大カ、新しい時代を切り拓く」

- 体育学・スポーツ科学・教育学の分野において、独創的、国際的な研究に挑戦し、新たな知を構築します。
- 豊かな教養と体育学・スポーツ科学・教育学に関する専門知識を備え、確かな創造力と実践力を持ち、リーダーシップを発揮できる人材を育成します。
- 体育学・スポーツ科学・教育学の研究・実践・人材の力を活かし、地域社会の活性化に貢献する拠点、および、世界で活躍するアスリートと指導者を育成・サポートする拠点となります。